

被災者のためフル稼働

震災では、本県でも多くの住宅で屋根瓦が壊れた。喜多方市に工場がある金属屋根メーカーのカナメ(宇都宮市)は震災直後から、軽くて丈夫な「金属瓦」に注文が集まった。喜多方工場はフル稼働を続けて増産に対応している。

同社は1978(昭和53)年に金属瓦を開発した。アルミニウムと亜鉛をメッキし、フッ素樹脂塗装を施したガルバリウム鋼板を使い、互同様の外観や重厚感を保ちながら、重さは10分の1と軽い。耐久性にも優れている。軽い屋根は地震による建物の揺れを大幅に抑えられる。震災後にあらかじめ注目を浴びたゆえんだ。

同社の技術は雷門で知られる東京・浅草の浅草寺にも取り入れられている。同寺は耐震性や参拝客の安全を守るため、2007年に宝蔵門、09年から10年にかけて本堂の屋根瓦を約半世紀ぶりにふき替えた。工事には同社の金属瓦を進化させた「チタン瓦」を採用。約7万7千枚あった本堂の屋根瓦を9万枚のチタン瓦に替え、下地を含め約816トあった屋根の総重量を155トにまで軽量化した。

同社は07年、チタン瓦の製品化を評価され、第2回ものづくり日本大賞の経済産業大臣賞、本県の第1回ものづくりまもりのつくり大賞を受賞している。

金属瓦・カナメ

喜多方



震災後、金属瓦の増産が続いているカナメ喜多方工場

金属部品製造を主力とするエクストエンジニア(田村市常葉町)は、ベトナム・ハノイ近郊の工場で2014(平成26)年操業開始を目指し準備を進めている。同社は高い技術力で、少

も中国と比べて「優位」と話す。現地の日系企業を取り先とし、将来は中国への事業拡大も視野に入れる。「海外進出で成功の鍵を握るのは社員教育」と渡辺さんは言い切る。ベトナム

から幹部候補として4人を研修に迎え、日本語や日本の習慣を教え込んでいる。震災で部品の需要が高まり、攻めの一手としてハノイ進出計画を1年前倒し。渡辺さんは「国内でシェア拡大を図る戦略を練る一方、ベトナム工場を早く軌道に乗せたい」と意気込む。

ともに創る



金属部品・エクストエンジニア

田村



現地工場の幹部候補となるベトナム人研修生に指導する渡辺さん

ものづくり変わらぬ情熱



デザインや機能別に多様なテープの製造販売を手掛ける古藤工業

粘着テープで復興応援

定番品の梱包用粘着テープから工業配管の補修用テープまで、いわき市好間工業団地に工場を置く粘着テープメーカー、古藤工業が扱う商品は、実に多様な技術が盛り込まれている。

1940(昭和15)年に創業、88年に同市に工場を置いた。商品はさまざまな基本材料と粘着材を組み合わせて開発し、用途別に数十種類に及ぶ。配管などに使う防水テープは海外にも輸出している。

同社が手掛ける商品の一つに震災後、各地で話題になった「復興粘着テープ」がある。5寸の幅に「がんばろう福島」や「がんばっぺ いわき」の文字をプリントした。これまでも同市の魚メヒカリやリンゴなどをプリントしたテープ、金色テープなどを開発した実績がある。機能性を高めた商品開発と同時に「遊び心が入ったものづくり」も会社の特徴だ。

昨年12月には県ハイテクプラザいわき技術支援センターと共同で、放射性物質を除去するための「除染テープ」を発売した。震災復興の願いと気概を込めた商品の箱には「福島県・いわき好間工場生産品」と、堂々と明記している。

有紀

若松



海外からも注目を集める「オートドア セロ」。橋本さんも手応えをつかんでいる

エコな自動ドアに注目

会津若松市の有紀は、電気を使わない自動ドア「オートドア セロ」を開発。今や国内にとどまらず、海外からも注目を集めている。

この原理を応用し、ドアの前に埋め込んだ踏み板に体重をかけると、扉がスライドして開く。すでに県内の店舗や学校、県外の高速道サービスエリアなどで施工実績がある。

昨年は政府が東京電力、東北電力管内に電力使用制限令を出し、節電が義務化された。省エネどころか、まったく電気を使わないドアに一段と注目度が高まった。「餃子の王将」を全国展開する王将フードサービスが店舗での導入を始めた。スガが店舗での導入を始めたほか、東急百貨店が4月に東京・渋谷にオープンさせる商業施設「ShinQs(シンクス)」内でも採用が決まった。また、中国で開かれた不動産や住宅設備関連の展示会にも出展、引き合いがあった。

常に改良を加え、ニーズに応える。踏み板部分に点字プレートをつけてほしいなどさまざまな要望も届いている。コストダウンの努力も実りつつある。社長の橋本保さん(57)は「今は電動の自動ドアより設置費用がかかるが、電動と同じ価格になれば、光が見えてくる」と自信を見せる。

古藤工業

いわき